

補助事業こそ「命」

「補助」事業という表現が、個人的にはあまり好きではありません。辞書によれば「足りないところを補って、助ける」とありますが、何となく「補助を受ける」側に対する、「補助する」側の目線の高さ、上からの視線を感じるからです。とは言え、変わるべき適切な言葉も見当たらないので、このまま使いますが、競輪・オートレースにおける補助事業とは、JKAと補助先とが一体となつて行う社会貢献活動であると、私は考えています。

外形的に見れば、競輪・オートレースが刑法の禁止する「賭博罪」に該当することは、誰の目にも明らかです。その点は競馬、競艇も同じなのですが、それが社会的に許されるのは、競輪の場合でいえば、自転車競技法が「自転車その他の機械の改良……並びに体育事業その他の公益の増進を目的とする事業の振興に寄与するとともに、地方財政の健全化を図る」という目的のためなら、自転車競走＝競輪を実施してよいと定めているからです。要は補助事業によって社会的に貢献すること、地方財政に寄与することを条件に、本質的には賭博である競輪の違法性がなくなるということなのです。

このことからすれば競輪・オートレースにおける補助事業とは、競輪・オートレースの社会的正当性を担保するものであり、競輪・オートレースに付随して行われる「付録」ではなく、競輪・オートレースの「命」そのものなのだと思います。補助に使われるお金はJKAのものではありません。車券を買ってくださったお客様から時、預かっているという性格のもです。それをできるだけ有効に、効率的に使っていただけよう、補助先の諸団体と共同歩調で、着実に進みたいと考えています。競輪・オートレース事業の収益悪化に悩む競輪・オートレース施行者・自治体首長の中には「補助金の原資である」JKAへの交付金を減らせ」との声も一部にあるようですが、「命」である補助事業はこれからも守り、育てていこうとの決意と信念は、JKA職員共通のもです。

財団法人 JKA 会長 石黒克巳

目次

会長エッセイ——2

目次——3

補助事業について & 補助事業の仕組み——4

機械工業振興補助事業とは——5

リングリングプロジェクトを訪ねて／

「財団法人 コンピュータ教育開発センター」——6

「社団法人 発明協会」——8

「工学院大学工学部」——10

補助事業ポスター——12

公益事業振興補助事業とは——13

リングリングプロジェクトを訪ねて／

「ツール・ド・北海道」——14

「社会福祉法人 日本点字図書館」——16

「ジャパンオープン飯塚国際車いすテニス大会」——18

「認定NPO法人 アレルギー支援ネットワーク」——21

「秋田県大館市立東館小学校」——22

競輪選手が訪ねた補助事業／

「名古屋市工業研究所」——24

「社会福祉法人 信濃医療福祉センター」——25

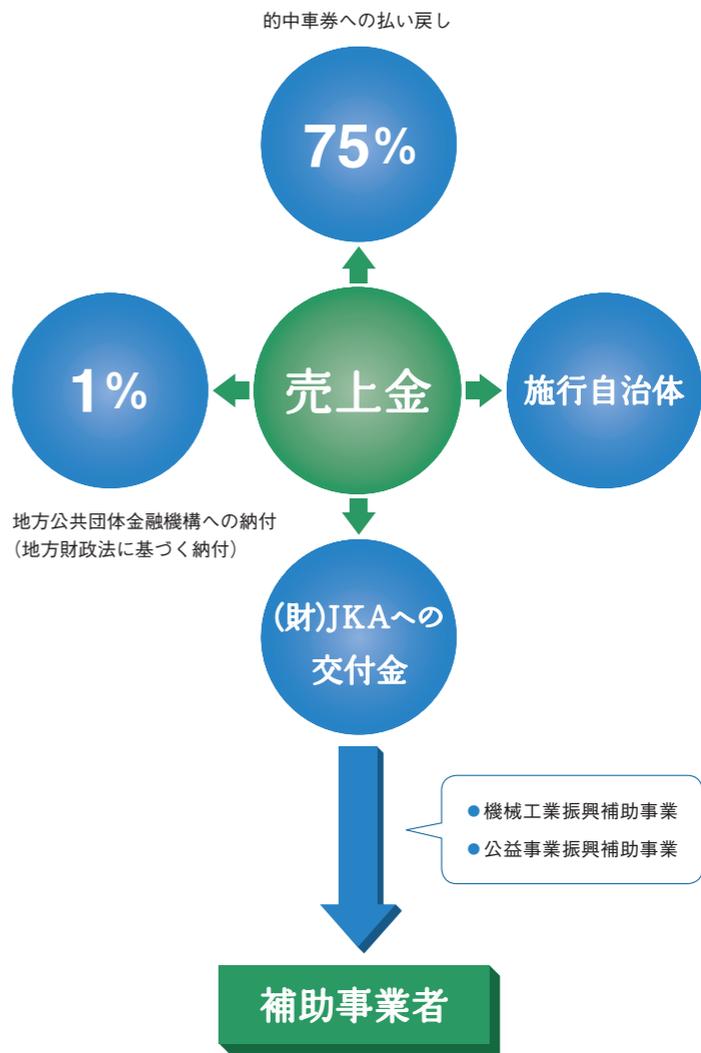
ホームページ紹介——26

お問い合わせ先——27

JKAの補助事業

本財団の補助事業は、地方自治体が施行する競輪・オートレースの売り上げの一部を、広く社会還元することを目的とし、国の支援が行き届いていない範囲を中心に、機械工業の振興、社会福祉等の公益事業及びこれらの分野に役立つ研究を支援します。このたびの東日本大震災に遭い、復旧復興に直面する状況下で、早期回復のために何が重要かの視点に立ち、特に復興に貢献する事業・活動の支援を行うため、限られた財源を効果的に活用し、震災復興の支援に重点的に取り組みます。

補助事業の仕組み



機械工業 振興補助事業

- 安全・安心、人命事故に関する取り組み支援
 - 公設工業試験研究所等の機器整備支援
 - 地域の中堅・中小企業の振興
 - 研究者の自由な発想による意欲的な研究
- 地方自治体が開催する競輪・オートレースの売上金の一部は、機械工業の発展に大きな役割を果たしております。

機械工業における先駆的な取り組みを応援しています。

親子に向け、安心・安全なネット社会の歩き方を指導

財団法人 コンピュータ教育開発センター

教材を手に講師の話に耳を傾ける子どもたち。
その表情は真剣そのもの



情報化社会と言われる現在、パソコンや携帯電話は、今や生活になくてはならないツールの一つである。「財団法人 コンピュータ教育開発センター（CEC）」は、学校におけるコンピューター利用促進のための基盤的技術を研究開発し、コンピューター教育に関して普及啓発することを目的に、1986年7月、文部科学省と経済産業省の共管で設立された団体。ネットでのトラブルや犯罪など、陰の部分の解消にも力を注ぎ、2008年度から親子を対象に情報モラルや情報セキュリティを伝える「親子のためのネット社会の歩き方セミナー」を行っている。

CECでは、この事業に向けて有識者による検討委員会を設置。テキストを開発し、それを教材としたセミナーを開催。教育委員会や学校、PTA連合会などからの応募を受け、2008年度に6校、2009年度には14校で講義を行った。

聞けば、保護者の情報モラルへの知識レベルはまだ低く、「なんとかしなければと思いつながら、何をどうしたらいいのかわからない」状態の人が多いという。子どもたちもまた、認識の甘さから、

帯を渡すなら親の態度も大切」などと、自身の認識が改まったという感想が多く寄せられているのが印象的だ。

「家族で話し合う前から子どもたちがパソコンや携帯電話を使っていて、親がその利用状況を把握していない、なんてこともあるようです。これまで保護者向けの教材はなかったようで、PTAなどからも評価していただきました」と言うのは、CEC総務部総務課長の赤松伊佐代さん。

保護者向けの教材の最後には、「基本は親子のコミュニケーション」という一文が記されている。ネットを安心・安全に使うためのアクションは、親子関係や日常モラルの向上にも大いに役立つであろう。

CECでは、今後、より多くの場で展開していただけるよう、教育委員会などを通じ、テキストの提供と指導者の育成を行っていくという。

(季刊誌「だる」Vol.10 番号より抜粋)



セミナーでは、保護者だけを
集めての講義も行われる。
多くの方が「家に戻ったら
子どもと話し合い、ルールづくりを
していきたい」と決意をするようだ

気づかないままに被害者や加害者となっていることもあるのだとか。そこで、テキストでは、迷惑メールやなりすまし、ネットいじめ、フィッシング詐欺などによる被害のほか、個人情報扱い方や著作権等について、イラストを交えてわかりやすく説明。それぞれ、対処の方法やマナーの守り方などのアドバイスも掲載している。

セミナーでの子どもたちの様子は、「講師が驚くほど熱心に、講義に聞き入っている」とのこと。また、保護者たちからは「子どもにも携



セミナーで使われる教材。
児童・生徒向けのテキストは、ちょうど携帯電話を持ち始める時期を考え、小学校高学年から中学2年あたりを対象に内容を作成。
教材は、CECのサイトからもダウンロードできる
<http://www.cec.or.jp/net-walk/>

ものづくりの自主的に取り組む子供たちを応援する 社団法人 発明協会

日曜日の朝から千葉市にある千葉市科学館の一室で、楽しそうに工作に励んでいるのは「千葉市少年少女科学クラブ」のメンバーだ。

このクラブは工作などの実技を通じて、子供たちの創造力を伸ばし、科学や技術に対する興味を深め、豊かな人間性を育てていくことを目的としている。運営の母体は、発明の奨励や知的財産の啓発活動を行っている社団法人発明協会。子供向けのクラブ活動は1974年から開始され、千葉市のクラブは全国で2番目に古い歴史を持つ。2008年5月1日現在、全国47都道府県に202のクラブがある。メンバーの総数は9000人以上という。

5月から本年度のカリキュラムが始まり、新規生の子供たちは半年かけて工作の基礎や技術を学んでいく。千葉市少年少女科学クラブ会長の山本喜也さんは、「最初はのこぎり等工具の使い方やハンダ付けの仕方など基礎的な技術を覚えてもらい、簡単な工作からスタートします。設計図を引くような難しいことは少し後回しにし、子供たちの作りたいものを出来る限り形にして、ものづ

くりの楽しさを知ってもらいたいと思っています。継続生は、これまでの経験を生かして活動しています」と話す。昨今、理科や技術科が苦手な子供の増加が問題視されているが、山本さんによると、この春の募集では定員の3倍もの応募があり、女子も非常に多かったという。クラブの男女比は約半々だ。

クラブの子供たちを見ていると、面白いことに気づく。小学校3、4年生という腕白盛りであるのに、私語が非常に少ないのだ。大人しいのではなく、誰もが熱心に自分の作品に取り組んでいるからだ。ときどき聞こえるざわめきは、仲間同士での相談や議論だ。わからないところを積極的に指導員に質問しているクラブ生もいる。与えられた課題を機械的にこなすのではなく、自分の思い描く物を作り上げる喜びがあるからだろう。

クラブ活動で学んだり作ったりすることは、学校とは何が違うのか。クラブの指導員を務める三宅健次さんはこう話す。「最近の技術料の授業では、パソコンを使うことが多くなり、工作をするということが少なくなってきました。ものづくりには試行錯誤や遊び心が必要なのですが、



「僕たちは車を作るつもりなんだ！」
子供たちの頭の中の設計図が形になっていく



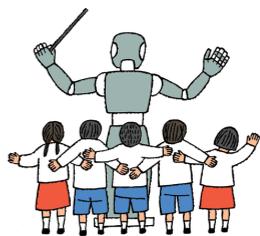
技術や科学に興味を持つ女の子も少なくない



わからない点は積極的に指導員に質問する

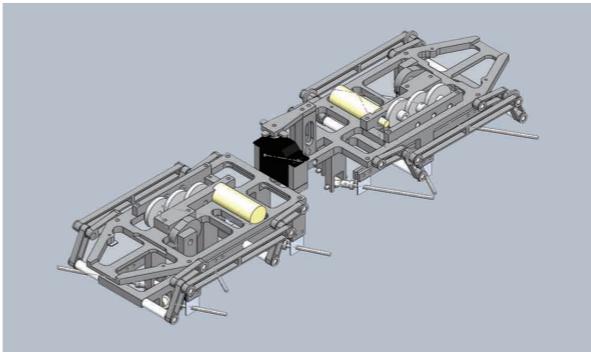
学校では時間的制約があったり、理論を教えなければならなかったりします。その点、こうしたクラブでは子供たちの自由な発想を、どこまで実現できるか追求していくことができます」

理系離れで技術大国ニッポンの凋落が心配されている。JKAは「ものづくり」に自主的に取り組む子供たちの活動を、これからも支援していきます。
(季刊誌「V.O.I.4」秋号より抜粋)



昆虫ヒントに小さく安く軽く素早く 工学院大学グループのレスキューロボット

小さくて、すばやくて、あっちこちに着くようによいいて、どんなものの上でも歩き、狭い隙間にももぐりこむ——まるでゴキブリのようだが、ゴキブリではない。その正体は、災害現場でがれきに埋もれた被災者を見つけるための、「同時多発式」小型レスキューロボット



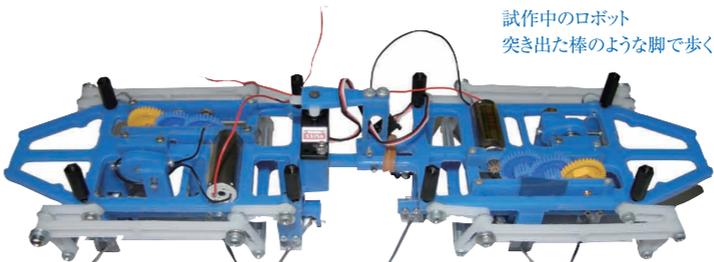
コンピューターで製図した
小型レスキューロボット

スキューロボット。そんなロボットを研究開発しているグループがある。工学院大学工学部の見崎大悟講師とヒューマンインタフェース研究室の院生や学生たちだ。昨今、東日本大震災をはじめとして、地震活動が活性期を迎えている。災害救助ロボットには、いくつもの課せられた条件がある。災害後72時間以上経つと、救助を必要とする人の生存率が大幅に低下するので、まずは時間との闘いがある。また、現場はがれきなどが散乱し二次災害の危険があることも多い。人手が追いつかないほどの広範囲を、同時に探索しなければならぬ。素早く探索するという基本的性能は備えつつ、安価で簡単に沢山作れ、自立して動き、人が入れないような狭い所にも入れるほど小さいもののほうが、現場では有効になる。

そこで見崎さんのグループが採用したのが、昆虫からヒントを得た、小さなモーター一つで関節のある6本の足を同時に動かす「多脚リンク機構」だ。

ではないかとの見方がある中、いざという時に災害救助に「使えるアイデア」を準備するため、基礎研究にいそしんでいる。

広範囲の探索現場に大量投入



試作中のロボット
突き出した棒のような脚で歩く

これだと例えばブルドーザのような無限軌道型の移動装置よりも、小さく軽く、それでいて障害物を乗り越えて動くことができる。小さなロボットには、小さな自然界の昆虫の体の仕組みがヒントになる例が、しばしばある。

また、なるべく人間が操作しなくても、自律で探索活動ができるように設計し、さらに、簡易な通信装置で近くにいるロボット同士がデータを送受信し、多数のロボットが繋がって通信ネットワークを構成する。これで、電波を遠くへ飛ばす重い無線機を積まなくて済み、難しい指令や計算などは、ネットワークでつながったパソコン側でできるようにする。

目標10センチ以内1万円以下

このようなロボットの本体や通信装置の基本型を現在開発中であり、23年度JKAの補助金を受ける研究で、さらに小さく、安く、素早く、信頼性高く、を実現しようとしている。具体的には、全長10センチ

以内、コストは1台1万円を切り、机の上から落としても壊れないくらいの丈夫さを持つ。

見崎講師は、静岡県焼津市の出身。子どものころから、いずれ東海地震が来ると意識させられた。だから、大学で物づくりの研究を始めた時、レスキューロボット開発に行き着いたのは、ごく自然だった。

研究室の院生や学生は、子どものころからロボット・コンクールなどに参加した経験者が多いという。「もっと小さく作れないかな」「いや先生、それはちょっとと厳しい。もう少し余裕をください」。研究とは言いながら、師弟のやりとりは、なかなか楽しげだ。

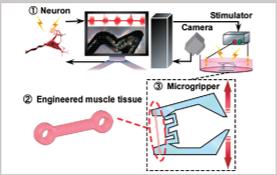


その他の機械工業振興・研究補助

振興補助

件名	事業者名
 <p>自転車を題材とした体験学習「サイエンス教室」</p>	(公財)日本科学技術振興財団
 <p>RT(ロボットテクノロジー)マッチングプラザ支援補助事業</p>	(社)日本ロボット工業会
 <p>若手デザイナーの育成</p>	(財)大阪デザインセンター
 <p>公設工業試験研究所等の設備拡充</p>	埼玉県産業技術総合センター
など89団体	

研究補助

研究テーマ	研究者
 <p>潤滑油のいらない摩擦誘起超低摩擦軸受の開発</p>	名古屋大学大学院 工学研究科機械理工学専攻
 <p>生体機械融合による機能補助システムの開発</p>	東京農工大学大学院生物 システム応用科学府
など88団体	

詳しくは、補助事業ホームページ(<http://www.ringring-keirin.jp>)の補助事業一覧表をご覧ください。

公益事業 振興補助事業

人にやさしい社会を作る公益事業を応援しています。

- 自転車・モーターサイクル、文教・社会環境、国際交流、
体育・スポーツ、医療・公衆衛生など公益の増進
 - 東日本大震災の復興支援
 - 児童、高齢者、障害者のための社会福祉の増進及び車両整備
 - 青少年の健やかな成長を育む活動、人間力育成支援活動
- 地方自治体が開催する競輪・オートレースの売上金の一部は、
社会生活の向上に大きな役割を果たしております。



無限の夢へ、走りだそう。



RING!RING! プロジェクト

競輪&オートレースの補助事業

地方自治体が開催する競輪・オートレースの売上金の一部は、モノづくり、スポーツ、
地域社会への貢献など、さまざまな分野の事業に役立てられています。

くわしくはウェブで



∞(無限大)の数字記号と二輪を重ねあわせて、
無限の夢と可能性を込めました

地域の新しい魅力を 作り出す ツール・ド・北海道

「ツール・ド・北海道」は、北海道開発庁が提唱し、1987年に始まった本格的なステージレースである。かつて日本経済が華やかだった頃、ツール・ド・フランスのようなステージレースを日本でもという思いに、地域振興の願いも込めながら、手探りで始めたイベントである。

この事業を支えたのは、北海道内の企業などであるが、「この20年の激しい社会情勢の変化や、経済の悪化といった状況に翻弄されながら、とにかくにも21回を迎えることができたのは、JKAの、強い支援があつたこと」と語ってくれた関係者たち。そして、同じ期間中に、選手たちの駆け抜けたコースを走る市民レースにも、道外を含め750人も参加者があり、今や北海道における自転車レースの底辺拡大になくてはならないイベントになっているとも聞いた。

ステージレースとは、ゴールした地点に宿を取り、毎朝次のゴール目指して連続して走る旅レースといってもいい。選手たちをサポートするのはチームのスタッフだけではない。警察の車、審判員の移動を支える数多くの車やオートバイ、オフィシャルのメカニシャン、地元の人たちによる立哨員、朝に夕に、スタートとゴールの会場を設営しながら移動する人々、マスコミの人たち……。100台近い自転車を走らせるために、実はその何十倍といわれる人たちの働きがあつて成り立つのがステージレース。その舞台裏のスケールは想像を遙かに超えるものだ。

選手たちは、チームのエースを守りながら、コースの特徴や、相手の出方を見逃すまいと、細心の注意を払い、ひたすら走り続けるのだ。しかし、ただ走るだけでは勝てないのがステージレース。駆け引きとも言われる戦術や、戦略が大きな力を持つ。もちろん監督の果たす役割が大きいことは言うまでもない。そんな生身の人間が、沿道に集まった沢山の観客に励まされ、宿の食事に元気をもらい、地域の魅力を楽しみながら走るのがステージレースの魅力だといってもいい。

雄大な北の風景の中を、色とりどりのジャージを着た選手たちが、ホイールの風を切る音を残して走り抜けていく風景はツール・ド・



寿都町日本海岸を走行する選手たち

フランスにも似て、北海道の新しい魅力を感じさせてくれる。ツール・ド・北海道は、自転車レースの世界を超えて、地域の新しい魅力を作り出そうとしている。自転車は、そんな不思議なパワーを持っているのかもしれない。

(季刊誌「V.O.I.」冬号より抜粋)

リングリングプロジェクトを訪ねて



上／千歳市支笏湖から札幌市に向かって最後の山岳地帯を走行する
下／札幌市モエレ沼公園



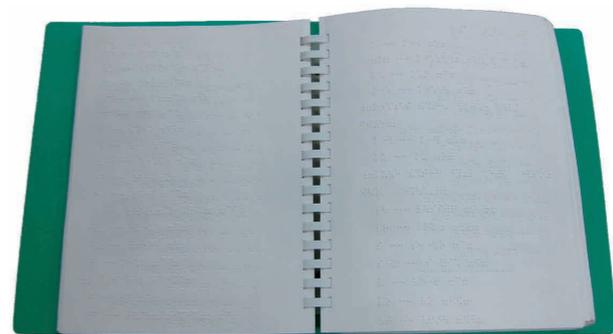
登別市太平洋を背にオロフレ峠に向かう選手たち

視覚障害のある方々の「自由な読書」の環境づくりを目指す

社会福祉法人 日本点字図書館

映画やテレビ、インターネットによる動画配信など、私たちの身の回りには「見る」娯楽があふれている。しかし、視覚に障害を持つ人々にとってはそれらを自由に楽しむことは難しい。それだけに「読書」によって得られる楽しみは大きいのだという。

そうした人々に、書籍や雑誌などに触れ、情報を得る喜びを提供しているのが「社会福祉法人日本点字図書館」である。その歴史は古く、1940年11月、自らも視覚障害のある本間一夫氏が蔵書700冊を持って日本盲人図書館を創立したのがはじまり。創立70年を超える現在は、点字図書と録音図書、合わせて5万点近くの蔵書を有する日本最大の点字図書館として、日本全国はもとより海外在住の視覚障害者も対象に、点字図書や録音図書の製作・貸し出しを実施。さらに、書誌情報提供などのレファレンスサービスや中途視覚障



愛好者も多い「指で読む」点字図書。数か月から1年ほどをかけ、専門知識を持つボランティアによる点訳～読み合わせ校正～製本と多くの行程を経てつくられる。点字はすべてかなでの表記となるため、辞書などは、実に100冊以上ものボリュームになるものもある

貸し出しケースに入った
デイジー図書。書籍1冊分が
CD1枚に収められている



害者のための点字教室をはじめ、さまざまな図書情報提供サービスを行っている。それらのなかで今回とくに注目したいのは、1999年8月からサービスを開始し、利用者も年々増加傾向にあるという「デイジー（デジタル録音）図書」だ。これは、世界基準で認められている音声圧縮方式を使った、カセットテープに変わる「声の図書」。1枚のCDに50時間ほどの音声データが収録可能で、利用者は、パソコンや専用の再生機で聴くことができる。昨年度4月から「にっぺんデイジーマガジン」という月刊CD雑誌を発行し、現在は毎月6500部ほどを全国に郵送している。

カセットテープの頃は、貸し出し、返却のやりとりなどが生じていたが、このCD雑誌は配布。発行にかかる手間と時間、費用の軽減が実現した。また、これまで一部抜粋だった雑誌を全文掲載するなど、内容も格段に充実している。

「視覚障害者の方々にとっても、頭出しやしおりづけなど、デジタルならではの機能によって、聴く便利が増しています。また、これまでは前号の返却がないと次号をお貸し出しできなかったのですが、CD雑誌なら手元にずっと残せ、ご自分のペースで聴いていたいただけるのも良いことだと思います。ただ、点字図書

館の利用者の平均は60歳をこえており、パソコンや専用機器の使い方を覚えることに抵抗を覚える方もいらつしやいます。そこで、現在、カセットテープのみを使っている一部の方に、機器の貸し出しや使い方のアドバイスなども行っています」と、社会福祉法人日本点字図書館総務部総務課の石出恵さんは話す。

現在、多くのスタッフがそれぞれの能力を生かし、日々一丸となって視覚障害者の「娯楽」と「情報収集」をサポートし続けている。新しいことも取り入れながら真摯に取り組むその姿を、今後も応援していきたい。（季刊誌であるV.O.R.14月号より抜粋）

パソコンに取り込んだCDのデータをダウンロードして利用できる小型のプレーヤーや取り出し可能なカバーをつけることで簡単に操作できるなどの工夫がされたものなど、さまざまなタイプが揃うデイジー図書の専用再生機



毎月発行されている
月刊CD雑誌「にっぺんデイジーマガジン」



日本点字図書館内の書庫にびっしりと
おさまられた点字図書。図書館という性質上、
あらゆる分野からバランスを考えた本が揃う



館内のワンフロアにある録音図書を製作するスタジオ。
1冊の蔵書は、通常、朗読から録音までの作業を
ひとりのボランティアが担当する

「打って素早く戻る」国枝選手が6連覇 ジャパンオープン飯塚国際車いすテニス大会



国枝慎吾選手の6連覇をかけた戦いに注目

車いすが急旋回する。乾いた打球音とともに、ボールが相手コートに弾む。ワンバウンド、ツーバウンド、ボールがコートに落ちる寸前、相手選手のラケットがすくい上げる。

ボールのスピード、ラリーの回数、通常のテニスの試合にもひけを取らない見ごたえがある。さらに、車いす操作のスリルが、プラスされているといってもいいかもしれない。

プレーしているのは、国枝慎吾選手と斎田悟司選手。5月に行われた2011年ジャパンオープン飯塚国際車いすテニス大会の男子シングルス決勝だ。両選手とも、プロのプレーヤー。ことに国枝選手は、2006年以来、世界ランク1位を続けているトッププレーヤー。このジャパンオープンには、大会6連覇がかかっていた。

トップはテニスだけで生計

障害者スポーツとしての車いすテニスは、アメリカで1970年代の半ばごろ、競技中のけがで下半身不随となったスキー選手が始めたことされる。競技用の車いすの改良なども進み、80年代の初めには、アメリカ各地で車いすテニスツアーも行われるようになった。日本では、80年代の前半から普及活動が始まり、当時全国で唯一のせき髄損傷専門治療機関があった福岡県飯塚市で、85年に初めて飯塚国際車いすテニス大会が開かれた。当時の目的は患者のリハビリとともに、社会の障害者への見識を改め、バリアフリー化を

進め、就職の機会を増やすことだった。また、障害者の側に、社会参加への意欲を高める狙いもあった。第1回大会の参加選手は78人、内訳は国内が64人、外国からが14人。その後参加者は増え、200人以上を記録した年もあったが、今年東日本大震災の影響もあり、91人の参加だったという。

選手は、せき髄の損傷などによる下半身麻痺が多いが、年がたつことにリハビリの手段としてよりはスポーツとしての普及が進み、現在では、全国のプレーヤーは日本車いすテニス協会の会員・賛助会員だけで2000人以上。そのトップ選手は、プロとして活躍しており、国内外の大会の賞金やスポンサーの支援で、生計を立てている。テニスで飯を食っていけることは、障害のある人にとっても、いい励みになっている、という。

地域が支える「われら」の大会

車いすテニスのルールは、ツーバウンド以内に返球することが許されている以外、コートの広さを含め、ほとんど普通のテニスと変わらない。使用する車いすは、急な動きに耐えるため、車輪が地面に向かってハの字に開いており、素材もアルミやチタンを使って軽量化し、強度を高めている。



勝負を左右するのは、打つてもとの位置に戻ってまた打つてという素早い動き。そのためにトッププレーヤーは、テニスの練習のほか、ウ



エリートレーニングで上体や腹筋・背筋を鍛えるという。アスリートそのものなのだ。

日本はコートが増えたり、道具が進歩したりで裾野が広がり、外国選手との交流や専属コーチの存在もあって、世界の強豪国とみられている。国枝選手、斎田選手のほかに、世界で戦える選手が多い。結局、ジャパンオープン飯塚国際車いすテニス大会の男子シングルス決勝は、セットカウント2-10で国枝選手が勝利、6連覇を達成した。

JKAでは、2004年以来大会の運営費を支援しているが、九州車いすテニス協会の仲野正明

事務局長は「飯塚市では毎年2000人を超える市民ボランティアが、運営に協力してくれて盛り上がります。学校、企業、医療機関も理解が深い。また、国際車いすテニスツアーのスーパースリーズに属するアジア・オセアニア地域唯一の大会であり、その地域の人たちが、自分たちの大会と想ってくれている。ぜひ今後とも末永く続けていきたい」と話している。



東日本大震災の被災地を

応援しています

東日本大震災発生直後の、医療救護活動や救援物資支援などに続いて、今後、被災地では長期的・広域的に、復興に向けての多様な取り組みが始まります。こうした状況に対応して被災地での日々の暮らしのニーズに沿ったきめ細かなサービスや、被災者の方々が自ら取り組む復興活動への支援補助を行っております。



平成23年度公益事業振興補助事業

東日本大震災復興支援補助

※この内示は、平成23年7月14日現在のものです。最新の内容は<http://ringring-keirin.jp> をご覧下さい。

	事業者名	事業概要	都道府県
第1回 (平成23年5月26日) 東日本大震災復興支援補助 小計5件	1 (N) 子どもの権利条約総合研究所	被災した子どもたちが意見表明・発信・参加できる仕組みの構築	東京都
	2 (一社) ピア	被災地域のがん患者等のウイッグ(かつら)のニーズ調査・支援活動	静岡県
	3 (認N) アレルギー支援ネットワーク	被災アレルギー患者・家族への支援	愛知県
	4 法政大学 (サステイナビリティ研究教育機構)	被災市民調査の実施、仮設住宅エリアのニーズ調査	東京都
	5 (N) 多言語センターファシル	被災移民のための情報発信(タガログ語)を通じた移民コミュニティのネットワーク作り	兵庫県
第2回 (平成23年6月2日) 東日本大震災復興支援補助 小計5件	1 (N) 東北みち会議	「道の駅」による被災地域支援拠点、支援の仕組みの構築	宮城県
	2 (財) 福島県労働保健センター	避難区域等における避難が困難な住民への健康調査の実施	福島県
	3 (N) グローバルヒューマン	被災者へのカウンセリング・生活再建支援活動	京都府
	4 早稲田大学理工学術院総合研究所	被災地(三陸地方)の地形調査	東京都
	5 北塩原村商工会	避難民受け入れ地域における震災復興イベントの開催	福島県
第3回 (平成23年6月15日) 東日本大震災復興支援補助 小計4件	1 (N) ワンワンパーティクラブ	被災者のペット(犬)一時預かり支援活動	静岡県
	2 東北公益科大学	被災地の高齢者ケア施設への調査・支援活動	山形県
	3 (N) いわて景観まちづくりセンター	景観資源の被災状況の調査・報告活動	岩手県
	4 (N) アーバンデザイン研究体	「復興まちづくり」のための調査・提案活動	東京都
第4回 (平成23年6月30日) 東日本大震災復興支援補助 小計8件	1 (N) 未来図書館	被災した児童・生徒へのキャリア教育支援(被災児童が各々より幸せに生きるための教育支援)に向けた現状調査	岩手県
	2 (N) 全国美術デザイン教育振興会	被災者のメンタルケアを目的としたカウンセリング支援活動	東京都
	3 (公社) 日本水産学会	三陸沿岸の湾の水質調査	東京都
	4 (N) 映像記録	被災地域の復興基礎資料となる記録映像の撮影・制作活動	大阪府
	5 田村学園 多摩大学	被災地災害対応拠点としての「道の駅」調査・分析	東京都
	6 (N) よつくらぶ	「道の駅よつくら港」を拠点とした地域復興支援活動	福島県
	7 (N) 日本アントレプレナーシップアカデミー	被災企業と支援企業のマッチング事業創出のための調査活動	大阪府
第5回 (平成23年7月14日) 東日本大震災復興支援補助 小計6件	1 (N) 栄村ネットワーク	被災者自らが発信する被災・復興に関する情報誌の発行	長野県
	2 東北工業大学	仮設住宅地(長町)における仮設入居者への支援活動	宮城県
	3 (N) ひたちNPOセンター・with you	被災地(常磐地域)の市民、行政、企業のネットワークにかかる実態調査活動	茨城県
	4 (一社) 社会応援ネットワーク	被災した子どもたちへの心のケアを目的とした冊子作成のための取材・調査活動	東京都
	5 松本大学 東日本大震災災害支援プロジェクト	被災地小学校(石巻市立大街道小学校)へのカウンセリング支援活動	長野県
	6 (N) 日本リザルト	被災者の生活・事業再建支援を目的とした調査活動	東京都
6 (公社) 日本フィランソロピー協会	企業人ボランティアの被災地派遣コーディネート活動	東京都	

名古屋のNPOにJKA震災復興支援

「二重苦」に耐える アレルギー患者を救いたい

厚生労働省の全国調査では、食物アレルギーの患者は全人口の2%程度、ぜんそく患者は6%強。東日本大震災の被災者の中には、計算上、万を超える人数のアレルギー患者がいることになる。

名古屋にある認定NPOアレルギー支援ネットワークには、震災当日の夜、各地から患者の状態を心配するSOSの連絡が入った。それに対応して震災3日目には盛岡、仙台を拠点に、緊急支援物資を現地に届け始めた。日ごろから備蓄してあったアレルギー患者用アルファ米3000食、それに使用する水、赤ちゃん用粉ミルク50缶に、阪神大震災の時の経験から哺乳瓶も20本用意した。



避難所では、患者がお腹をすかせていた。乾パンなど一般向け緊急援助食品には、卵、乳製品、小麦を含まない、アレルギー患者が食べられるものが、極めて少なかったからだ。アレルゲンとなるものが含まれた食品を食べると、最悪の場合ショック症状を起こし、命にかかわるケースもある。震災後の1週間を、症状を引き起こしにくいおにぎり用の白



米だけ、それも、ふりかけなどで味付けがされる前のものを分けてもらい、しのいだ患者もいた。

また、津波で普段使っていた薬や、ぜんそく発作用の電動吸入器を流されたり、避難所でもなかなか風呂に入らず皮膚を掻き壊したりした患者も多かった。当初、緊急対応で被災地へ入った医師は、アトピー患者用の強いステロイド剤を持っている例が少なく、医療面でも手が届きかねた。しかし、それでも患者から窮状を訴える声は、思いのほか、少なかったという。「みんな、がんばろう」の気運の中、食べ物などの特別扱いを言い出しにくい雰囲気があったようだ。子どもの患者が親と離れて、自分の症状や対応方法をつかみ切れていない

ケースもあった。

災害とアレルギーという「二重苦」に耐える患者たちに対し、ネットワークでは、20人近いボランティア体制で、拠点を増やしながら、食糧支援を続けている。各避難所ごとに「アレルギー患者を支援します」と、連絡先を明記したポスター(左)を張った。さらに、患者だけでなく、避難所の関係者や地元行政などに理解を広げる努力をしている。

今後は、患者であることを、すぐに周りの人にも理解してもらえるよう、「緊急カード」の所持と、腕につける「アレルギーっ子のリング」を製作・普及させることを目指している。JKAの支援は、そのリングの制作に充てられる予定という。

ネットワーク理事の栗木成治さんは「今回、震災2週間後には、日本アレルギー学会や小児アレルギー学会と協働体制ができ、医療支援を受けられるようになったのは前進でした。アレルギーの専門医が現地に行ったり、医薬品の手配をしても良かった。しかし、厚労省や自治体には、アレルギー患者への対応がほとんどありませんでした。NPOだけでは限界があり、その点が今後の課題です」と話している。

食物アレルギー、ぜん息、アトピー性皮膚炎など
アレルギーでお困りの方
ご相談、ご連絡ください。
●安心に、お悩みにお答え、迅速な対応を心がけています。
●アレルギーの現状、必要とされている事を知りたくて欲しい。
アレルギーの食生活相談会 <災害後編> にご参加・ご連絡ください
NPO法人 アレルギー支援ネットワーク 事務局 中西
TEL: 052-485-5208 又は070-5451-2347
ホームページ <http://www.aller-net.com/> メールアドレス info@aller-net.com



人生の先輩から「生きる力」を学ぶ 秋田県大館市立東館小学校の「みんなの未来科」

様々な分野で活躍する人生の先輩を学校に招き、どんな夢を持ち、悩み、歩み続けてきたのか、子供たちとひざを接して語り合う、そんな「小学生のキャリア教育」の試みが、この春から、秋田県大館市の市立東館小学校で始まった。

厳しい過疎化の現実

古くから秋田杉の集散地として栄え、曲げわっぱ、比内鶏、切りたんぼなど、「秋田名産品」の本場でもあるこの地域だが、林業の衰退につれ、年々、人口減少・高齢化が進む。「秋田県全般の問題ですが、地元と思うような職がなく、高校に入っても目標を見失って中退してしまったり、都会に出ても、うまくいかなくて、また戻ってくる子も多いのです」と、校長の三浦孝志先生は生徒たちの将来を案ずる。

なんとなく学校を出ただけでは、生き抜けない現実。子供たちの視野を広げ、多様で具体的な、未来へのイメージや目標を持たせたい——そんな切実な思いがこめられた授業は、名づけて「みんなの未来科」。三浦先生は「キャリア教



グラウンドで武田さんが実技指導

育といっても、小学生にとっては、仕事や職業を決めるというより、生き方を学ぶのが目的」という。

とも多いからだ。生徒数は5、6年生合わせても30人ほど。文字通り、膝を交えてゲストと向かい合える、小規模校ならではの贅沢さだ。

今年度の授業は、主に5、6年生を対象に、10回計画されている。前半は、三浦先生がインタビュ

アーになり、ゲストと生徒の対話、後半はゲストの実演や実技指導という、2部構成。壇上からゲストのお話を拝聴する講演のスタイルはとらない。とかく一方通行で、生徒の聞きたいこととポイントがずれてしまうこ

その第1回は6月8日、元プロ野球投手で現在NHK野球解説者の武田一浩さんをゲストに招いて行われた。野球という「人気科目」でもあり、この回だけ、3、4年生や父母の希望者を交えて、100人近い大規模授業に。

プロが教える基本の「き」

最多勝利、最優秀救援投手などのタイトルに輝いた武田さんが、子供時代、「素振りを100回しないと家に入らない」と親と約束し、実行していたこと。171センチと言う小柄な体で4球団に在籍したプロ生活では、毎日10キロのランニングを最後まで欠かさなかったこと。初めから結果を求めるのではなく、コツコツ続けることが大事なこと。

漫画やアニメではなく、初めて聞くその道のプロの肉声は、子供たちに強い印象を与えた。

後半は、グラウンドで、野球部の子供たちと一緒に実技指導。まず教わった事は、「キャッチボールをしっかりしよう」。つまりボールの投げ方の基本だった。野球部の監督によれば、その直後の練習から、子供たちは目に見えて必死にボールを追い、元気に声を出すようになったという。

2回目の授業は、秋田在住の落語家、3回目は大館出身の飲食店経営者。4回目以降はまだ固まっていないが、企画書には候補として、パティシエ、保育士、警察官、写真家……など、バラエティーに富んだ職業が並ぶ。

かつて頑張っている人・いきいきと生きている人」がポイントだ。会えるものなら、大人だって元気をもらいたい、そんな人間像。できる限り地元と関わりのある人を、と、三浦先生自ら、生徒たちの希望も考慮しながら、つてを頼って「求人中」だ。



その他の公益事業・新世紀未来創造プロジェクト

件名	事業者名
補助犬訓練施設の建築	(公財)日本補助犬協会
青少年のスポーツ大会の開催	(財)全国高等学校定時制通信制教育振興会
囲碁による青少年の健全育成	(公財)日本棋院
障がいを持つ音楽家の社会参加を支援	(N)日本バリアフリー協会
撮影/川津貴信	
など 406 団体	

新世紀未来創造プロジェクト

件名	事業者名
地元特産品の栽培による地域交流	袖ヶ浦市立根形中学校
地域に伝わる伝統文化の継承	京都市立朱雀第三小学校
など 17 プロジェクト	

詳しくは、補助事業ホームページ(<http://www.ringring-keirin.jp>)の補助事業一覧表をご覧ください。

お礼の花束を贈る生徒たち





名古屋市 工業研究所

名古屋市工業研究所は設立以来、名古屋地域の企業の発展に寄与している公設試験研究機関です。中小企業では、資金的に自前で機器を持つ事が出来ない場合もあるので、公設試験研究機関に検査・測定を依頼します。このような地域企業の役に立つために、競輪補助事業のサポートを受けた多くの検査・試験機器が導入されています。最近では自動車部品等の試作支援に必要な高速引張り試験機、衝撃圧縮試験機、X線CTが導入されました。これらの機器で部品の機械的特性などを検査・測定し、実験データとコンピュータシミュレーションを融合した部品設計により製品の品質向上や、製品不良の原因究明に役立っています。



「高速引張り試験機」。試験片を高速で引っ張り、その引っ張られた時の伸びや、破断時における力を計測します

(福)信濃医療 福祉センター

信濃医療福祉センターは、肢体不自由児施設と重症心身障害児施設を中心とした、リハビリテーション病院です。センターでは整形外科、リハビリテーション科、小児科など各科の専門医をはじめ、理学療法士などが協力し合い、チームアプローチで子供たちをケア。また、同じ建物の中に養護学校が併設されているのも大きな特徴で、長期入所の子供たちは治療・訓練を受けながらこの学校へ通学し、小中学校及び高等学校教育が受けられるようになってきているなど、医療・訓練と生活指導、教育の3つが一体となった、総合的な療育を行っています。



「X線透視撮影装置」。身体障害を持った児(者)の疾病診断をするために、より鮮明な画像が得られ診療の向上に役立っています



新潟支部 支部長
原田則夫選手(41期)
弥彦にも障害を持った方の施設があり、新潟支部で毎年慰問して見ているので、改めてこういうところに携わる人は大変だなと思いました。こういった施設には、どんどん補助金を出してほしいなと思います。



愛知支部 支部長
一丸安貴選手(70期)
競輪の補助金がどう使われているのか、全く分からなかったのですが、この施設のように、直接的に、施行者の税金になるのではなく、補助金として、税金とは違う形でフィードバックされているのが分かって良いと思います。

財団法人 JKA

〒102-8011 東京都千代田区六番町4番地6英全ビル



お問い合わせ先

次の問い合わせ先にメールまたはFAXをお願いします。

補助事業グループ

●機械工業振興補助事業 機械・サイクル振興チーム

FAX / 03-3512-1274

e-mail / kikai24yobo@keirin-autorace.or.jp

●公益事業振興補助事業 公益・福祉振興チーム

FAX / 03-3512-1277

e-mail / koeki24yobo@keirin-autorace.or.jp



無限の夢へ、走りだそう。
RING!RING!
 プロジェクト
<http://ringring-keirin.jp>

日本が生んだ世界のスポーツ



ホームページについて

競輪・オートレースの補助事業について、皆様に、より一層理解していただき、身近なものと感じてくださるよう、補助事業の愛称を「RING!RING!プロジェクト」としています。この「RING!RING!プロジェクト」ホームページ内では、補助事業の申請手続きに関することをお知らせするだけでなく、これまでに実施した補助事業について、その概要や事業成果をわかりやすく公開しています。

<http://ringring-keirin.jp>

